

OUR VOICES

2025

特集:アンドベース入居者5人による対談
コラム:5 Perspectives

ANDBASE Newsletter

POCO A POCO



ホームレス問題 今どうなってる？

2010年に活動を開始したHomedoorは、ホームレスの人々を対象に路上脱出のための支援を行ってきました。ところが活動を重ねるうちに、相談者層は若年化・多様化。若者たちが置かれている状況を知るために行った来所アンケートでは、10～20代の若年相談者の83%が、虐待や親の死別・離婚、生活困窮など生育環境における社会的不利を経験していることが明らかになりました。福祉サービスが必要としている人や就労に不安を抱えている人など、従来のシェルターだけでは対応しきれない事柄にも直面してきました。

アンドベースって？

誰もがやり直せる環境を作るためには、メンタルケアやキャリア支援も利用でき、安心して暮らせる生活の土台が重要ではないか。そんな思いから「心と生活の両面を支える場」として開設したのが「アンドベース」です。2023年の開所以降、延べ61人がアンドベースを利用しています。



『POCO A POCO』ができるまで

本誌は、2025年9月から12月の間、アンドベースの住人5人が5回に分けて行ったグループディスカッションを記録したものです。この5人は、住人参加型の報告書の作成をアンドベース内で呼びかけ、参加を希望したメンバーです。グループディスカッションでは、これまでの生活や利用している支援のことなど、延べ12時間にわたり議論。さらに2時間を超える編集会議を経て、今ここにお届けします。タイトル『POCO A POCO』は、住人たちによって命名されました。表紙やイラストも、住人たちの意見を元に作成しています。

はじめに

「誰もが何度でもやり直せる社会」をつくる。

そんな理念のもと活動するHomedoorが、インクルーシブシェルター「アンドベース」を開始して約3年が経ちました。

本誌はアンドベースの報告書ですが、活動の成果をスタッフの視点でまとめる、従来の報告書とは異なるかたちをとっています。その背景には、支援団体によるこれまでの報告書が相談に訪れた人々を「当事者」と一括りに客体化してきたのではないか、という私たち自身の内省がありました。

本誌が目指したのは、アンドベースで暮らす住人たちの経験や想いが、読者へ直接届くことです。住人たちが語りたいことを語り、その語りをどのように届けるのかも自ら決める。そのために、住人たちとスタッフが車座になって議論を重ね、編集作業も共に行いました。

一人ひとりの経験や思いは、それぞれ異なります。

ある意見に共感の声が続くこともあれば、異なる意見がそえられることもありました。必ずしもまとまりがあるわけではない、まとまることを目指したものでない議論は、わかりやすさを求める読者の方にはノイズのように響くかもしれません。

しかし、まとまりのよさを求めることでこぼれ落ちる言葉があるのではないか。ならば、むしろノイズにこそ光を当てたい。私たちはこのように考えました。

「語られる」客体としてではなく、「語る」主体として。

少しずつ熱量が増していく私たちの「声」を、きいてください。

POCO A POCO 製作委員会
永井 悠大 浦越 有希



DISCUSSION MEMBERS

本誌の制作委員としてディスカッションに参加した、5人の住人とスタッフを紹介します。これまでの経緯や、好きなこと・得意なことを自由に語ってもらいました。次の対談ページを読み進めていただくにあたり、それぞれが歩んできた経験や、大切にしてきた時間、価値観をより深く理解する手がかりとしてご覧ください。



じゅん

小さい頃からサッカーが好きで、今も時間があればボールを蹴っています。高校もサッカー推薦で決まりましたが、経済的な理由で進学は諦めて働きました。派遣切りに遭いアンドベースに入ってから、サッカーを通じた居場所づくりの活動に参加しています。2025年はホームレス経験者が参加できる「ホームレスワールドカップ」の日本代表としてノルウェー大会に出場しました。



まもる

体を動かすのが好きで、アンドベースのクラブ活動でキャッチボールを楽しんでいます。学生の頃はテニス部でした。幼少期から家族による暴力があり、高校を中退後は期間工などで食いつないできました。Homedoorに来るまで誰にも相談できず一人で頑張ってきたので、20代折り返しになるこれからは周りを頼ることも覚えられたらと思っています。



きいち

家庭環境が複雑で幼少期は親戚の家をたらい回しにされてました。それでもなんやかんや楽しく生きてこれました。今はタクシーの運転手で、大変っちゃ大変ですけど、接客好きなので楽しいです。これ読んでくれる人に乗車いただくことがあるかもしれないですね(笑)。最年長の37歳なんで、おっちゃん混じってるやんと思われるかもですがよろしくお願いします(笑)



そら

ゲームが得意で、マリオカートなら誰にも負けません(笑)。大学を中退してネットカフェで過ごした後、アンドベースに入りました。ひとり暮らしの経験がないので自炊などの家事を練習しています。アンドベースではスタッフさんや入居者さんと一緒に取り組む料理会やゲーム大会を楽しんでいます。退学した後も連絡をくれる同期との交流も良い息抜きになっています。



つむぎ

音楽が好きでジャンル問わず聴きます。あとは読書したり、ストレッチと瞑想したり……とゆっくり自分に向き合う時間を大切にしています。これからは色々な領域の勉強がしたいですね。好奇心は旺盛なほうだと思います。今回、最年少(20歳)で好き勝手に話しましたが皆さんじっくり聞いてくれて嬉しかったです!(笑)



永井 Homedoor 相談員

広島出身の野球好きで、アンドベースのキャッチボール部を担当しています。休日はビール片手にカーブを応援しています。試合結果が振るわない日の翌日は落ち込んでいますが、入居者のみなさんとの雑談から元気もらっています。

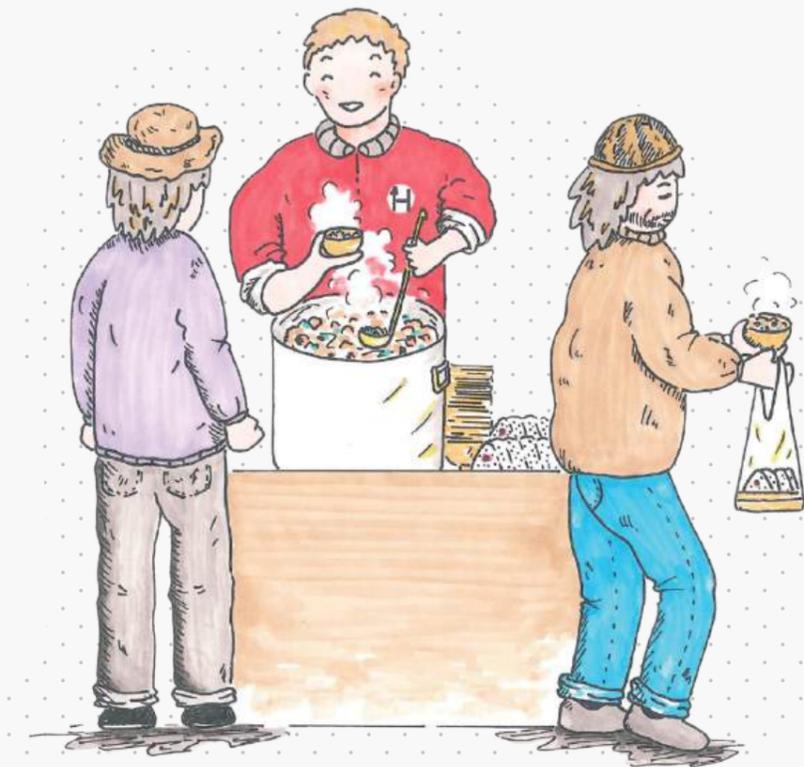


浦越 Homedoor 相談員

お酒を飲みながら小説を読むのが好きです。毎月アンドベースでゲーム大会を開催していますが、まだ勝てたことがありません。仕事上、「掃除が苦手」「金銭管理が難しい」という相談をよく受けませんが、私も苦手なので一緒に悩んでいます。

「貧困」「ホームレス」

という言葉についてどう思う？



金銭的に必要なものがない「貧困」と、親から愛情を受けられない精神的な「貧困」があるかなって。「ホームレス」は家がない、家自体はあるけど自分の居場所がないっていう状態かな。自分は親との折り合いが悪くてネットカフェにいたので。



「貧困」は、言葉のイメージとして「逃げ場のない困り感」が響きのコアなのかなって。「ホームレス」は社会との関係性を表す言葉の一つ。



住所あるけど帰られへん状況。折り合いが悪い家族との同居とか。派遣先の寮とかも、僕的には家とは言い難い。



「ホームレス」は路上生活をイメージしたんですけど、自分も暴力を振るう家族との同居経験があるので、「家はあるのに帰れない状態」っていう意見を聞いてハッとさせられました。



派遣先の寮を出されて公園に行くしかなくなった時、「自分がイメージしている『ホームレス』に、自分もなったんやな」って思いました。

ドラクエの教会!?

つむぎ 「ホームレス」ってその人の属性やステータスではなくて、自分の特性と社会の規範が合わなかったっていう、社会との関わり一つというか、状態を指すものなのかなって。例えば、ゲームのキャラクターで「この人は魔術師です」みたいなステータスとは違うと思うんですよ。

きいち 今、ゲームの例えで言ってたけど、ドラクエって普通の状態だったらステータス白色なんです。で、毒とかくらったら「状態異常」っていつて紫色になるんです。ホームレスってそんな感じで、今、「状態異常」になってますっていう。誰にでもあり得ることではあるけど、常に毒消しを持つてるやつは、毒くらっても毒消しを飲んだらすぐ白色に戻るんですよ。それがお金とか家とか、そういうことであって。僕は今、紫から白色に戻ってきて。だからまあ、ここ(Homedoor)が教会やってみたいな感じですね。

永井 ドラクエでいう教会?(笑)
きいち そうです(笑)。「状態異常」を直して。永井 今のお話って、つむぎさんが話してくださったことと似てますか?
つむぎ えっと、似て非なるものです。私はホームレスにはなっていないので視点の違いは多少なりともあると思うんですけど。先の毒の

例えでいうと、「毒にかかった」っていうのは個人の状態じゃないですか?なので、「社会の規範とのズレとしてのホームレス」っていうのが、言葉としてすごい確だなと思って。「ホームレス」という独立した状態があるわけではなくて、すごく相対的なもので、そこから浮かび上がったものに名前を付ける「ホームレス」だったっていうわけだから。

「ホームレス」と

言われることについて

つむぎ 「ホームレス」っていう言葉を自分事として認識した時に、侮辱的に感じたりしますか?
きいち 僕はなかった。
じゅん 自分も全くなかったですね。

きいち もう仕方がないというか、開き直りじゃないけど、それは多分、人それぞれの事情があつてのことだし、多分、傍から見たら分からへんから。
つむぎ 言葉に帯びるオーラとして「ホームレス」「貧困」っていう言葉がどのぐらいマイナスなものや侮辱的な意味合いがあるのかっていうのが気になって。
きいち 当事者は思わないかもね。ひよっとすると、でも世間的なイメージではマイナスイメージやけど、一旦経験してしまうと、そんなに。

「貧困」と「貧乏」の違いとは?

むぎ 「貧困」かどうか?さっきの自分の質問は、自分が「貧困」って言われたことに対して感じたある種の侮辱感からくる疑問のような気がして。
きいち そもそも貧困って簡単に言うかどうか?貧しい?貧乏とは違うんですよね?きつと。

つむぎ 極端な貧乏だと貧困になるのかっていえば、それもなんか違う気がしますね。
きいち そう。なんか、貧乏って言われたら、まだふざけてボール投げられてるぐらいでしょう?「えーい」って。貧困やと石投げられるみたいなの、そんな感じがしますよ。
つむぎ 今、漢字見て思ったんですけど、貧乏と貧困って、「乏しい」か「困ってる」かなんですよ。だから、確かにその差ってありますね。

そら 僕は漢字を見て思ったのは、「貧乏は」あるけど不足っていうか、ストックはないというか、常にカツカツの状態でなんとか回してる感じなのかなと思って。貧困だともう全然、手元に何も無いのが貧困とか、全然満たさないとか、そういうのかなって。
まもる 全然違う話かもしれないんですけど、「貧困ビジネス」っていう言葉があるじゃないですか。でも、「貧乏ビジネス」っていうのは聞かないんです。やっぱり、貧困の方がすごい追い詰められている感っていうか。

まもる 割り切れてなくて。やっぱり、当たり前かもしれないんですけど、二度となりたくない、路上で生活をしたくないの。
永井 完全にこう割り切れているわけではないし……
まもる 割り切れてなくて。やっぱり、当たり前かもしれないんですけど、二度となりたくない、路上で生活をしたくないの。

ちょっと軽めの……。

きいち 単位が違うってことや。貧困やともうその日の暮らしみたいなの。なるほどね。
つむぎ だから、侮辱的に感じたのかも。名詞だから。

きいち 「ホームレス」は別にあれですけど、「貧困」って言われると……。例えば、僕と僕の知り合いがおつて、知らんやつから「お前、貧困経験者やな」って言われたときに、僕より、僕の知り合いがどういイメージをするかですよね。「あつ、こいつそうなんや」って。きつと角は立ってるんですよ。ガチガチの。

つむぎ コンクリートみたいな?
きいち そう、バーンってやられているように

に見えているのか、さっきの貧乏の話じゃないけど、ボールを「えーい」って投げられているだけに見えるのかといたら、多分コンクリートですよ。だから、そう考えると侮辱的かもしれないですね。
じゅん 改めて皆さんが話してるの聞いたら、やっぱり、「ホームレス」という言葉より自分は「貧困」のくくりの方になると、ちょっとなんかきつように感じるんかなって。ちょっと気づいたっていうか。



貧困と貧乏の違い



これまでの人生を振り返って、

「嬉しかったこと」「困ったこと」は？



小学校の時にリレーの県選抜に選ばれて、全国3位になったのが嬉しかったです。小さい頃から母親からの言葉の暴力があって。15歳で家を出たので最初はもうしたらいいのかわからず困りましたね。



地元を出てからは常に楽しかったですね。仕事ではパチンコ屋の店長になったり。なんやかんや、楽観的に生きてこれました。幼少期は父親からの暴力と母親の育児放棄がありました。



大学では同期にめぐまれて居場所ができました。ただ、父とは中学生頃から衝突していて私の大学進学にも反対していたので、応援してくれていた母がなくなり、退学することになりました。



大学ではすごく大事な友達ができ、大好きな分野の勉強をできるようになったのが嬉しかったです。つらかったのは、小中学校でいじめにあったり、両親に見捨てられたことですね。



幼少期に母子家庭になり、家族からの暴力も経験しました。Homedoorへ来て初めて、幼少期から今までの色々なことを相談できて、ちょっとスッキリできたのは助かったなと思いました。

生活を送る中で気づくこと、考えること。アンドベースと自分の関係性。5人の住人たちが、それぞれの視点でアンドベースの一面を語る。

既にスタートは切っている

入居した頃を思い出してみた。就職して働き続けることが「一歩目」で、無駄な時間は過ごせないと焦りもあった。でも月日を重ね、自分と向き合う時間をつくって少し意識が変わった。新しい仕事に就いてはうまくいかず辞めての繰り返しもあったけど、それは一時のぎではなく、一歩一歩が今に繋がっている。アンドベースでの生活が「再出発の一歩目」で、既にスタートは切っているんじゃないかと今では思う。いくつものコースを選びながら、新しい分岐点を見つけていくんだろうかと前向きになれている。

まもる

キャッチボール

スポーツ好きな僕が楽しみにしているのは、月に一度のキャッチボールの日。朝十時に参加者とスタッフが合流し、河川敷に向かう。ストレッチをし、他愛のない会話をしながらキャッチボール。守備練でノッカーの調子が振るわないと「全然ボール来ないんですけど」とふざけたヤジも飛び、みんなが笑う。得意・不得意関係なく一緒に楽しむことができる。一球一球で盛り上がる。ポジティブな考えを継続できるようになったのは、キャッチボールで仲が深まり、繋がりが生まれたおかげだと思う。

じゅん

実験場

「先生、光が筋肉から漏れています。」オレンジ色の電灯の下、助手が眉間に皺を寄せた。「闇を十分に注がなかったからだ。それでは到底動かない。」先生はそう言うと、コートの襟を立てて実験場を後にした。「残りを上手くまとめて縫合しなさい。人は、均衡の元に美しく生きるものだよ。」立ち去る背中に目もくれず、助手は慎重に糸を通す。溢れ出す光を無理やり肉に押し込みながら、彼女はふと思った。——私は、十分な闇を持っているだろうか。

つむぎ

大切な助走の場

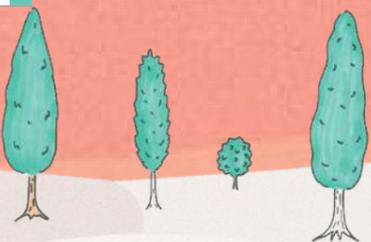
アンドベースは、社会復帰を目指す不器用な人たちのリハビリ施設のようなものだ。挨拶が返ってこないのは自分を組み立てる最中だから。共用備品の行方不明や洗濯ルールの無視も、今は自分の生活で手一杯だからだろう。時折折気になるタバコの匂いや、鍵の紛失騒動なども、きっとこれまでに色々な経験をした僕らが、「普通」とか「一般的当たり前」のようなところを取り戻すための準備段階だと思う。完璧な人間ならここにはいない。ここは精神的に負傷した人々がいつか再び社会に飛び立っていくための大切な助走の場なんだと思う。

きいち

意外な共通点

図書館には色々な人たちがいる。本を探している人、熟読する人、寝ている人。そんな人たちの横で僕は本棚と向き合うが、どれを選ぶと良いか悩む。司書さんが目に入る。声を掛けるか悩んだけど、ちょうど目が合ったので相談できた。図書館にはホールもあって、イベントをしているみたい。カフェスペースでは学生たちが談笑している。図書館という一つの場とそこに含まれる十人十色の過ごし方。たくさんの本から選ぶことと、それを相談できる人。思いついた。アンドベースって図書館だ。

そら





無理して仕事や頼み事を引き受けちゃうんじゃなくて、自分で判断して自分で選んだり断ったりできるようになることも、「自立」のひとつなのかなって。

毎日楽しいなって思えたら「自立」かなって思うんですよね。そういう意味では、僕はもうほぼ「自立」です。



助けたり、助けられたりしながら生きていくのが「自立」なのかなって。



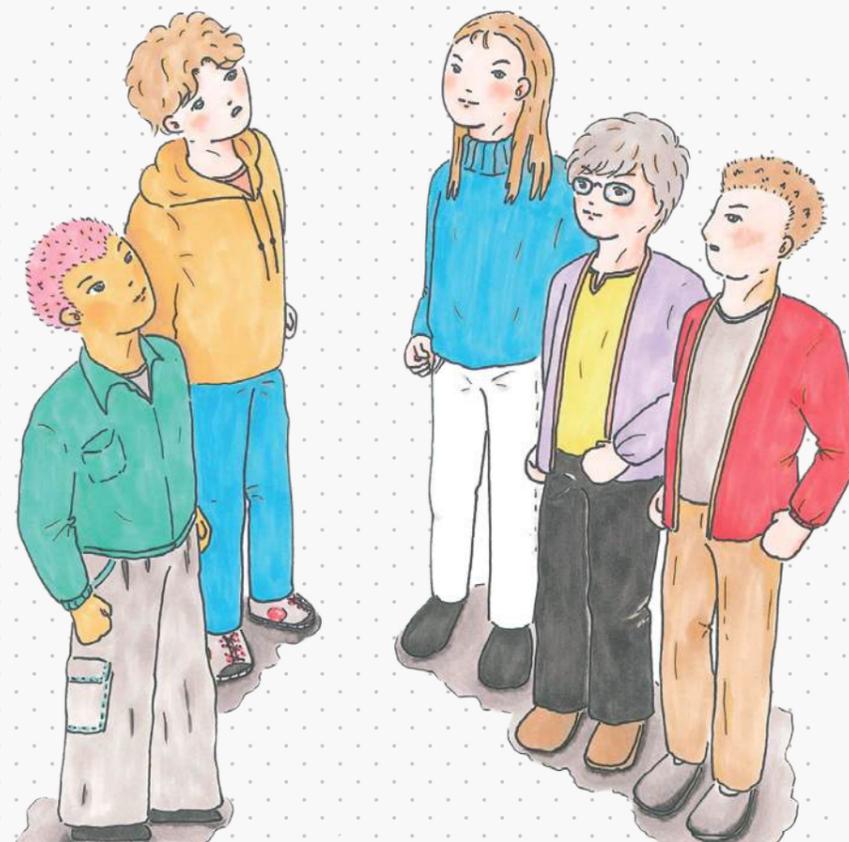
精神的な意味でも物理的な意味でも、行きたい場所を自分で決めて、そこに向かう努力をして、それを楽しめる状態を、私は「自立」って呼びたいかな。



何でも自分でやろうとするんじゃなくて、無理なことは「無理」って助けを求められるようになることも「自立」なのかなと思いました。



あなたにとって自立とは？



「自立」って何だ!?

じゅん 自分的に今回のテーマ、ちょっと難しくなったんですね。自分が話した「自立」って、当たり前の内容だよなって。多分そういうことじゃない、自分がした発言じゃない部分もあるんかなっていうのを、考えさせられた感じでした。

そら 確かに「自立」ってなんだろうって改めて考えました。レースだったらゴールがあるじゃないですか。でも「自立」ってゴールは自分で設定して、そこに自分が満足するのかわか。

まもる 最初、自分一人で「自立」を考えたときに「将来的には正社員」って思ったんですけど、これって過去に親から「正社員になれ」って言われたからそう思っただけだと気づいて。他の方の意見を聞いて、それだけじゃないというか。今は視野がすごい狭くなっているのでもっと柔らかく考えた方がいいのかなと思います。

つむぎ 「自立」って、必ずしも社会的に一人で生活ができるって意味ではなくて、もっと自己実現に似たかたち。精神的な活動とか肉体的な活動としてあるのでは、と思います。

そら 何をもって「自立」とするか、みたいな

感じですか？

つむぎ そうですね、その「自立」の定義は、本来、一人ひとりもしかしたら違うんじゃないかなと。

じゅん 確かに多分違いますよね。それぞれの「自立」って。自分の場合、一人で生活できるとか、自分に合った仕事に就くことが自立って話したけど、他の人からしたら多分違う考えだったりするし。だから何が「自立」なのかってなりませよ。

つむぎ もしかしたら、「自立」という目標に向かって進んでいくっていう構図自体が間違いないかもしれないです。例えば、今これをやりたいとか、一つひとつを取捨選択していく過程、それ自体を「自立」と呼ぶというか。

未来の「自立」と

過去から現在の「自立」

まもる 自分は稼げなくなったら折り合いが悪い親族につかまると思ってるんですけど、だから仕事は途絶えさせないようにしてるんですけど。僕の「自立」は収入を安定させて、ここ(アンドベース)を出ていくっていう。そこが一番です。

つむぎ 今のきいちさんのお話って生の声そのものですね。なぜお金を稼ぐのが重要なのかっていうところまでのお話をしてくれました。

まもる 逃げるために稼ぐっていう。普通の

「自立」を考える

時間をつくる?

じゅん 前回「最低限の生活をする」っていうありきたりな考えしか出てこず、めちゃめちゃ悔しかったです。今回は「何でも自分でやります」じゃなく、無理なら無理って言葉の環境を自分で作る「っていうのも」「自立」かなと思っただけ。

つむぎ 自分のことをちゃんと肯定してるのが本場にすぎない。

じゅん 助けを求められるようになればもっと楽になるって思ったので。その点(制度やアンドベース)役に立っているのかわからないのは思いますが。

まもる それはどういうところで思います？

じゅん 今後のことに関して、時間をかけて考えることができる、考える時間をつくらせてくれるっていうのがあるんで。そこがやっぱり一番大きいですね。今は。

永井 就労を急かされる環境だと、考える時間を確保するのって難しくなると思うんですけど、その辺の生活保護に対する評価っていかがですか？

じゅん (担当のケースワーカーから)急かされても時間をかけて(仕事を)探したいって意見を言わせてもらってます。

つむぎ 私もケースワーカーさんと最初の

ういうことだよ。

じゅん そうです。

まもる それは納得。でも、きっと、みんながみんなってわけではないってことだよ。担当者によるよって。

つむぎ それが利用者と提供者の問題と繋がるんでしょ。提供者と利用者に関しては、絶対に立場的な優劣っていうのが発生するわけだから。その中で生まれるひずみみたいなものだってあるし、それが結果的に起こしている問題の一つが、(就労を)急かすとか、真摯に向き合っていないところなんだろうなって、今、想像してました。

それぞれの自立



頃、喧嘩してます(笑)。自分が下で相手が上っていう上下関係があって、それに従わざるを得ない構造っていうのが、一番大変ですよ。 **そら** 自分は急かされるとは感じなかったですね。僕が感じていないだけなのかわからないけど。前から思ってるんですけど、せっついて無理やり就かせるより、ちゃんと自分に合った仕事を見つけた方が絶対いいはずですよ。(行政は)統計上の生活保護の人数を減らそうとしているようにしか見えななあって。 **じゅん** だから自分はやっぱり、民間の Home doorとかの方が相談しやすいなって思ってます。 **まもる** 多分、さっき言ってた上下関係ってそ

考えてはないかもしれないですけど、稼ぎ続けている以上、逃げ切れる。常にマリオカート(キノコ)を使っているようなもの(笑)。 **つむぎ** 前回、きいちさんが不在だったときに私たちが喋ってた「自立」って、基本、未来のことですよ。でも今のお話って、過去から現在における「自立」の話じゃないですか。その視点の違いが面白いなと思って。 **まもる** 前回の議事録読ませてもらったら「朝起きられなかった自分を責めてしまっ」っていうのがあって。自分は朝起きて仕事行きたくない時は「今日は行くだけでOK」って思っで行ってるんですよ。ハードルは低くしかなないと潰れちゃうんでね。いいんですよ、寝坊したって。眠いもん(笑)。それでも行っちゃったってことが大事やし。迷惑かかる時はかかるし。絶対嫌なこともあるけど楽しみ方って自分で見つけることやから。今の自分は仕事と衣食住はある程度いける。あとは毎日楽しいなって思えたら「自立」かなって思うんですよ。そういう意味では、僕もうほぼ「自立」です。



本誌の目的が達成できたかの評価は参加者と読者に委ねますが、私自身とても刺激的で貴重な経験になりました。企画者という立場上、「はじめに」で「わたしたちの『声』」と書いていいものか最後まで迷いましたが、「これは自分たちとスタッフさんで作ったものだから」という参加者の言葉に背中をおしてもらいました。

Homedor 相談員 永井

最初にこの話もちかけられた時点で、この本が持ちうるであろう圧倒的異質性とそのビジョンに興奮するスタッフに私も深く共感しました。その異質性を担保するための各々の"気遣い"と、そこから生まれる不思議な掛け合いは、そのまま本誌に記録されています。改めて、この「報告書」に携われたことに感謝致します。

つむぎ

「楽しかった」というのが率直な感想です。笑いながら話できて、1回参加できなかった回がありますが、それが悔やまれるぐらいです。もしメンバー変わったら、それはそれでおもしろいかなと思います。俺より年上の人も含めて、それでまた喋ってみたいですね。すごい楽しかったです。

きいち

1,2回目終わったぐらいから「あ、これやってすごい楽しいな」と思って、そこからたくさん喋るようになりました。終わっちゃうのがすごい寂しいです。話しても楽しいし、聞くのも楽しかった。内容的にちょっと重いのもあったんですけど、笑いもあって。みんなで決めてやるっていうのも楽しかったです。

そろ



自分の幼少期のことも話せし、それぞれの話も聞けて「あ、そういうこともあるんやな」とかも知れたし。そういうことを考えるようになったっていう自分の中の変化もあって、めちゃめちゃ貴重な場だったなと思ってます。自分的にはめちゃめちゃ楽しかった。回を重ねるごとに、みんながどんどん話すので、それも良かったです。

じゅん

それぞれの経験や考え方、今後真似させてもらおうって思えることもたくさん聞けて参加して良かったです。色々重なった時期もあって、正直参加したくない……という気持ちになったこともあるんですけど、振り返ったらプラスになっている部分が圧倒的に多くて。すべてのディスカッションを終えて、達成感を感じています。

まもる

イラストや4コマ漫画は、アンドベースの住人であるチャーさんが描いてくれました。たくさんのイラストや「ディスカッションの内容を4コマ漫画にしてほしい」という無茶ぶりに「みんなが良いものにしようとしているのが分かるから」と労を惜しまず応えてくれたチャーさんとのやり取りにも、多くを学ばせてもらいました。

Homedor 相談員 浦越



おわりに

POCCO A POCO

タイトルの言葉には「だんだんと、ゆっくり」という意味があります。だんだんと変化しながらそれぞれの道をゆっくりと進む住人たちの現在地点の声が、届いていたら嬉しいです。最後に、五回のディスカッションを終えてそれぞれが思うことは……。

認定NPO法人 Homedoor
ANDBASE Newsletter 2025『POCO A POCO』

制作・編集	きいち、じゅん、そら、つむぎ、まもる（『POCO A POCO』製作委員会） 川口 加奈、永井 悠大、浦越 有希（Homedoor）
漫画・イラスト	チャー（アンドベース入居者）
表紙デザイン	馬崎 愉羽
装丁・デザイン	野口 美波（Homedoor）

所在地	〒531-0074 大阪府大阪市北区本庄東 1-9-14
問い合わせ先	06-6147-7018 / info@homedoor.org
設立	2010年4月（2017年1月 認定NPO法人に認定）
ビジョン	ホームレス状態を生み出さない日本の社会構造をつくる
役員	理事長 / 川口 加奈 理事 / 岩田 真吾、松本 浩美、安淵 聖司 監事 / 杉浦 元
スタッフ	事務局スタッフ 17名、おかえりキッチンスタッフ 5名